

# 美しい日本語に誇りを持つ教育を



今に始まったことではないが、外来語や和製英語が年々幅を利かせている。例えば、文化庁が2014年度に実施した「国語に関する世論調査」では、夏季の職場などでの軽装スタイルを指す「クールビズ」は44・1%、デパート地下の食品売り場を意味する「デバ地下」も49・1%がそれぞれ「使うことがある」を回答している。「聞いたことがある」はいずれも9割を超えており、その浸透ぶりは著しい。

## 混在する在来語と外来語 世界で異例、危機感が希薄化

ただ、喜ぶわけにはいかない。外来語の安易な使用は日本語の乱れに拍車をかけ、国語としての日本語の存在を脅かすからだ。

この点に警鐘を鳴らすのは、エジプト生まれの日本語研究者、イハープ・アマド・エバードだ。今年5月に書いたコラムの中で、「外来語は日本語をより豊かにするという考えを否定しないが、むやみに多用すると日本語の地位が脅かされてし

●複合語の使用状況(文化庁調べ)	
婚活	25・4%(93・8%)
イクメン	21・6%(89・6%)
女子力	26・3%(87・1%)
デバ地下	49・7%(92・3%)
大人買い	36・8%(78・6%)
クールビズ	44・1%(90・8%)

※カッコ内は「聞いたことがある」  
まう」と指摘。とりわけ憂慮したのは日本語に対応する言葉があるのに、わざわざ外来語を使用することだ。「世界の言語からみても、外来語と同じ意味を持つ在来語と一緒に使われているのは異例」と歪な混在状況を嘆く。

国内でも13年6月、NHKの放送番組で「リスク」「トラブル」「ケア」「コラボ」などの外来語が乱用され、内容を理解できず精神的苦痛を受けたとして、岐阜県の70代男性が慰謝料を求める訴えを名古屋地裁に起して話題になったことがある。裁判長は翌年6月の判決で「番組で外国語を使用しても、原告の権利を侵害していない」として請求を却下したが、勢いを増す外来語の乱用に一石を投じたといえる。

とはいえ、国内で危機感は広がっていない。むしろ希薄になっている感すらある。それを示すのが、文化庁が12年に実施した調査だ。日常生活の中で外来語やカタカナ語を交えて話したり書いたりしていることを「好ましくないと感じている」人は5年前の調査に比べ4・5%ポイント減の35・3%にとどまり、「別に何も感じない」人も10・3ポイント増の54・0%に上った。外来語の乱用を容認する傾向は強まっているのだ。

外来語を日本語に言い換える動きもあるが、効果はそれほど出ていない。国立国語研究所は02年、「アーカイブ(保存記録、記録保存館)」や「ワーキンググループ(作業部会)」など、国民に分りにくい176の外来語について、該当する日本語に変

換するよう提言した。しかし、国の審議会の資料などでは「ワーキンググループ」は日常的に使用され、アーカイブも消えることはない。

## 新しい外来語で教育現場に混乱 外来語を有難る国民は日本だけ

それどころか、新たな外来語が次々と登場している。20年以降に小中高で全面適用される次期学習指導要領では、文部科学省が「アクティブ・ラーニング」という指導方法の導入を決定し波紋を広げた。一般的には児童生徒が能動的に授業に参加し学びを深める手法を指すようだが、「具体的な定義はない」(文科省幹部)ため早くも学校現場に困惑が広がっている。

観光分野では吊り橋「レインボー・ブリッジ」(東京都港区)、高層ビルと高級マンション群で構成される「六本木ヒルズ」(同)、自立式電波塔として世界一の高さを誇る「スカイツリー」(同墨田区)、日本一の超高層ビル「あべのハルカス」(大阪府阿倍野区)などが人気を博しているが、日本語での言い換えも可能だ。例えばレインボー・ブリッジなら「虹の橋」となり、風情あふれる名称として永く愛されることだろう。あべのハルカスに至っては、日本の文学遺産を蔑ろにするような所業とさえ言える。「ハルカス」は伊勢物語の一節に出てくる「晴るかす」(晴れ晴れとさせる、などの意)をカタカナで書き換えたものだ。宗主国の言語を強制的に押しつけられる旧植民地ならまだしも、日本のような単一言語を使う独立国家で外来語をこまごまで有り難がる国は、まず世界には見当たらない。

## 漢字崇拝、西洋崇拝の愚かさ 「平成」中国古典から採用

なぜ、日本はここまで外来語を無意識的に崇拝する傾向が強いのか。中国文学者の高島俊男は、日本人の思考様式を考察した『漢字と日本人』で、こう指摘する。「漢字崇拝の気分が、ひろくふかくゆきわたって、それが明治以降の、西洋崇拝、西洋語崇拝の素地をなした。(中略)つまり真理は外からくる、という点で同じこと。」

古くは論語や大学、中庸など「四書五経」の中国古典を崇め、幕末にはポルトガル、オランダ語を食欲に吸収。明治維新以降は英語、フランス語、ドイツ語の熱が高まり、1945年の敗戦後はマッカーサー率いるGHQの占領下では漢字廃止熱が高



※写真＝日本が美しい国だからこそ、多くの外国人が日本を訪問する。日本の自然、歴史、文化を体現するのが日本語。自国語を愛し、誇りを持つ普通の国になる教育が必要だ。

まった。作家の志賀直哉が、日本語が不便で不完全だとしてフランス語を国語にしてはどうかと提唱したことは有名だ。

46年には漢字の全面的な廃止が政府決定され、廃止されるまでの間、当面使用される漢字として1850字の「当用漢字表」が定められた。さらに徹底的な国家改造の一環として、米教育使節団が日本語のローマ字表記を勧め、日本の学者らで構成された国語審議会でも同様の論議が高まった。一方、日本語を破壊しようとする審議会の強引な議論の進め方などに危機感を抱いた作家の舟橋聖一ら数人が脱退し、ローマ字化の機運は失速。66年、当時の文部相が「当然のことながら国語の表記は、漢字か交じり文によることを前提」とすることを発表し、日本語のローマ字化の危機はようやく去った。

とはいえ、外来語への崇拝が弱まったわけではない。英語はこの戦後70年余りの間、政治、社会、軍事、経済、科学、自治体名などのあらゆる分野に浸透し、漢字崇拝も日本人の深い部分に根を張っている。元号が昭和から平成に変わる際、当時の官房長官、小淵恵三が中国古典の「史記」と「書経」から採用した「平成」を書いた台紙を、記者会見場で誇らしげに広げた光景を覚えている人も少なくないだろう。国家に関わる名称を隣国の古典を出典とする国は世界にどれだけあるだろうか。

## 無防備すぎる「国語防衛」 危機的な国語授業の貧弱さ

世界の歴史は自国、自民族の言語を守る戦いの歴史でもある。フランスが憲法



※写真＝レインボー・ブリッジに、スカイツリー。美しい日本語があるのに、なぜ、わざわざ外国語を使うのか。日本は他国の属国でもなく、植民地でもない。外来語を使いたがる国が、世界で日本だけだということを恥じるべきだ。

の中で「国語はフランス語」と明記しているのは、英語が世界標準となる中で真っ当な国語防衛策といえよう。それに引きかえ、日本の国語防衛は無防備すぎると言わざるを得ない。

現行の学習指導要領では、中学校の国語は1、2年が週4時間で3年が週3時間と規定されている。授業時間を大幅に減らし学力低下を招いたと指摘される「ゆとり教育」への反省から、中2で1時間増えたが、授業増の大半は英語、数学、理科、社会に振り分けられた。

作家の水村美苗は著書『日本語が亡びるとき』の中で、「アメリカ人に日本の中学校で日本語の授業が週3時間しかないの告げると、かれらは絶句する」と書いている。国語を週5時間教える欧米と比べ、日本の国語授業は貧弱というほかない。

水村は「今、私たち日本人は日本語が生まれてから未曾有の状況に直面している。『日本語は絶対に大丈夫』という信念を捨てる時に来ている」と指摘し、学校での国語教育の充実を訴えて止まない。

## 政府「日本語教育特区」を整備 「祖国は国語」愛着持つ教育を

国も日本語教育に本腰を入れはじめている。内閣府は読み書き中心の「国語」とは別に、日本文化の理解や豊かな表現力、感受性を養う独自のカリキュラムを念頭に置いた「日本語教育特区」を整備している。

04年に認定を受けた東京都世田谷区を皮切りに、新潟県新発田市、佐賀県鳥栖市などで「日本語」科が導入されている。鳥栖市ではことわざなどの「言語」、神話や俳句などの「伝統的言語文化」、かるた遊びや能楽などの「伝統文化」、あいさつなどの「礼儀作法」一々の4分野を年20～35時間教え、全国でも注目されている。

鳥栖市内の学校関係者は「美しい日本語を習得させるのに時間はかかるが、方向性は間違っていないと考える。日本語に誇りを持つ子どもたちを増やしていきたい」と話す。

「祖国とは国語である」とは、ルーマニア生まれの作家で思想家シオランの言葉として知られる。戦争続きの欧州では国は占領したりされたりして永続せず、国語こそが最後にして唯一の拠り所になるという意味だ。文化、伝統、歴史など祖国の条件を兼ね備えるものは国語しかない。日本語には情緒豊かな美しい言葉、言い回しが山ほどある。今ほど日本語に愛着を持つ国語教育が求められるときはない。(敬称略)